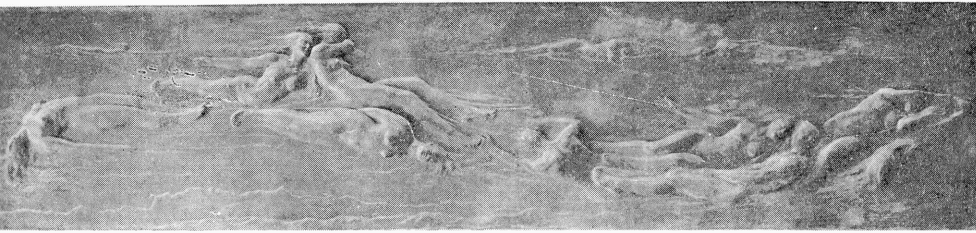


Title	図書館協力への道
Author(s)	森, 耕一
Citation	静脩 (1982), 19(2): 1-2
Issue Date	1982-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/36905
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



静脩

1982年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 19, No. 2

図 書 館 協 力 へ の 道

教育学部教授 森 耕 一

いまや英国図書館貸出部 (BLLD) のサービスは有名である。北白川にある英国文化センターが窓口だから、京都にいる人にとっては特に便利である。私も学部図書室のお世話で、これまでに一度利用したことがある。国内にないイギリスの雑誌の、19世紀半ばの論文2篇のコピーを入手できたときは、うれしかった。

BLLDのほかにも、イギリスには幾つかの図書館協力のシステムがある。大ロンドンの33区及びイングランド東南部9県の公立図書館を中心に(一部の大学図書館、議会、BBCなどの専門図書館も参加して)1969年に結成されたLASERも、その一つである。

旧ロンドン市内の公立図書館は、1930年から総合目録の編成を開始したが、第二次大戦後、1948年4月からデューイの十進分類表による分類番号を各図書館に割り当てて、小説以外の図書の分担収集を開始し、これは75年末まで続けられた。翌76年1月からは南東地区の県立図書館がこの収集計画に加わって、現在は42の公立図書館が分担して、国内出版物に関しては、ほとんど網羅的に収集している。分担の一部を示すと、統計学(310-319)はイースト・サセックス、語学(400-499)はエンフィールド、数学はブレント、天文学はサットン、化学はエセックス……といった具合であ

る。『英国全国書誌』(週刊)に登載された図書を分類に応じて、それぞれ担当の図書館が購入する。したがって、1948年以降の国内出版物であれば、ほとんど必ずロンドン及び南東地区内のどこかの図書館が所蔵している。

しかも、求めている図書の分類が分れば、どこが持っているはずということになるし、図書番号(1970年以降はISBN)に対して所蔵館を記録したマイクロフィルムの総合目録がLASER本部でつくられ、各館に配付されているから、この目録に載っていれば、本部に問い合わせるまでもなく、直ちに所蔵館が判明する。LASER所属の図書館で、年間に約20万件の相互貸借の請求があり、充足率は93%、BLLDに依存しているのは約5万件である。最近、相互協力よりも一か所に集中した方がよいという説もあるが、20万件(それが多少減ったとしても)BLLDに集まったらどうということになるだろうか。

イギリスの図書館の歩みをみていると、目録とか書誌とか、マニュアルの時代から基本的なことを手抜きをせずに積み重ねてきているので、着実に手堅く進んでいるという感じがする。機械化にしても、どの領域でも、アメリカよりは少しずつ遅れて導入しているようであるが、イギリスの方が基本がちゃんとできているから、導入したとき

は、より大きな威力を発揮するという感がある。カードの総合目録ができていたから、これを入力すれば、総合目録も一館の蔵書目録も、たちまちマイクロフォームでつくることができる。1982年4月からオンライン検索が開始されたが、これで相互貸借の業務も、非常に迅速に処理される。

附属図書館の新館完成後の機械化が、非常に楽しみである。ただ、コンピュータを導入すれば、これまでできなかったこと、困難だったことが万事解決できるかのように錯覚している向きがないでもない。これまで不可能に近かったことが、解決可能になるということは、原理的にはその通り

である。しかし、既蔵分のデータを入力するということが、量だけ考えても、たいへんな仕事である。それに長年にわたっているから、目録規則の変更、慣習の違いなどによって、不統一を生じているのではないか。そのような蓄積が、入力後の機能にもろに反映してくる。その辺のことが気がかりである。話は多少飛躍するが、外国から日本語の文献を求められたとき、BLLDのような見事な対応ができるのだろうか。国際化が進んでいる中で、おぶさるばかりが能ではなかろうと、そのことも気がかりになる点である。

国際会議データベースPICMS (数学・計算機) と CONPHYS (物理) について

数理解析研究所図書室 中司 里美

基礎物理学研究所図書室
理学部物理学教室図書室
(現附属図書館閲覧課)

平元みさえ
慈道佐代子

はじめに

PICMSは数学・計算機、CONPHYSは物理を中心とした国際会議データベースである。PICMSは数理解析研究所、CONPHYSは基礎物理学研究所を中心とした基礎物理学文献データベースグループがそれぞれデータベース構築を行なっている。これらは京都大学大型計算機センターの情報検索システムFAIRSのデータベースとして、PICMSは1980年9月、CONPHYSは1982年5月から公開されている。

両データベースの特徴は構築の面においては、データの収集から入力まで“自作”であり、図書室職員、研究者の共同作業の成果であるという点であり、内容の面においては、会議に関するレコードの種類に応じてシリーズ単位、本単位、論文単位の3つのレベルを持っている、という点があげられる。前者の特徴については次の1の作成の背景の項で、後者については2のPICMSの概要の項(以下)でそれぞれ述べる。

1 作成の背景

PICMS、CONPHYSの作成契機は1976年夏に始まり1980年夏に基礎物理学研究所により発行さ

れた「物理学国際会議録目録」の作成である。この目録は基礎物理学研究所、理学部物理学教室、数理解析研究所の図書関係者の会合から生まれた。雑誌購入調整の関連話題として雑誌に似た性格を持つ資料として総説雑誌(Review Journal)と継続して開催される国際会議の議事録とがあげられ、基礎資料としての目録作成が計画されたのである。目録カードのコピーから作業は始まり、冊子体の原稿タイプ、印刷配布まで足かけ4年を要した。

目録は次の情報を含む：

- (1) 継続会議名称と沿革(会議系列の把握)
- (2) 個々の会議開催情報
- (3) 会議録の出版書誌情報
- (4) 所蔵情報

従来の目録法では(1)(2)の表現が不十分であり、会議録を探すのが困難であった。この目録は会議に焦点をあて資料を再構成したものである。(1)については研究者の知識・判断に頼った。何ををもって継続とみなすかについては会議の組織からみた場合と、主題からみて利用しやすさを優先する場合とで見解が異なってくるが前者を優先し、利用